

日本書紀傳

十九卷三

五十二

和書
一〇五二二號

内閣文庫	
番號	和 10522
冊數	156 (60)
函號	特 85 1

内一六八三號



教部省
文庫印

圖書
文庫

南直
文庫

思測シソクざる故ユ小人世の一代限トにして相代サウダイるが如く
思シ成セす小コ至シれる者モノあり但タ予カ以テ説ハ余リ亦モ物
ちチして己コ止ムばく思シへり事コトを推シ量シる小コ過ヒたり心
の如ニく慥ニ小コ徴シる故ユ小コ其ノ実ニ否トを神カミ小コ質シす
奉ホウむとて恐オソるコト書紀シキ置キく小コふト云フ

由此發愠乃入千天石窟閑磐

戸而幽居焉故六合之内常闇

而不知晝夜之相代于時八十

内一二六八三號

萬神會合於天安河邊計其可

禱之方

上件ハ四神出生章第十一書より續きて天照太神の衣食住の事を世の始の物為さじ給ひて驗見蒼生を養給ふ道を超して天津日継を定奉らせ給ひて大御政是なり然る小以かして悉く小病け奉らせ給はるが故小何れも中休小して息ぬるが故小天照太神の甚く怒らせ御在り坐て終小天石窟の閑籠らせ

給ふ小至れる者なり備以衣食住の事の起原ハ一も以卷首小己名委しく云らぐ其小ハ主ハ二柱御神小事始て天照太神素戔嗚尊小成て其二大神の珍御子と御在り坐す天忍總耳尊より次々天津日継天津高御座小大坐して万千秋の長五百秋小食田天下を統御させ御在り坐べき事の所以を本より書記し奉る方小主と心を入れて説たりければ衣食住の本より其小属たる事あり有ければ共小云いハ云れども猶力足ざりければ以小再具文小述て云むとす以衣食住の事ハ一も神代卷中の大段小して甚止事無き所以有れば云へども猶予に中

の一をだか言得たり心ちの為ずして如^レ歎く何^レ度^レも
諄^レ返^レし云事^レして其^レ心^レを猶^レ云^レ思^レひ^レ予^レ為^レめ^レ
然^レる^レ古事記^レ国生段^レ先皇祖^レ天神の御名^レを記^レし奉^レ
の^レ畢^レたり後^レ於^レ是天神^レ諸命^レ以^レ詔^レ伊邪^レ那岐^レ命^レ伊邪^レ那
美^レ命^レ二柱^レ神^レ修理^レ固成^レ是多^レ陀^レ用幣^レ流^レ之^レ国^レ賜^レ天^レ詔^レ予^レ而
言^レ依^レ賜^レ也^レと見えたり^レ皇祖^レ天神の道^レの世^レに立^レ始^レり
所^レあり孝^レ德^レ天^レ皇^レ御^レ紀^レに^レ惟^レ神^レ謂^レ隨^レ神^レ道^レ亦^レ自^レ有^レ神^レ道^レ也
と所^レ見^レたり道^レして其^レ道^レを^レ存^レす者^レ即^レ修^レ理^レ固^レ成^レ是多^レ陀^レ
用幣^レ流^レ之^レ国^レと詔^レ給^レへる^レ是^レなり然^レる^レを御^レ紀^レに^レ稽^レふる
小^レ八洲^レ起^レ元^レ章^レ第一^レ一書^レに^レ天神^レ謂^レ伊^レ弉^レ諾^レ等^レ伊^レ弉^レ冉^レ等^レ
曰^レ有^レ豊^レ葦^レ原^レ千^レ五^レ百^レ秋^レ瑞^レ穂^レ之^レ地^レ宜^レ汝^レ往^レ循^レ之^レと見え^レて

右^レの修^レ理^レ固^レ成^レに^レ當^レて^レ以^レの^レ循^レと^レ有^レり斯^レれ^レに^レ伊^レ弉^レ諾^レ
伊^レ弉^レ冉^レ二^レ柱^レ御^レ祖^レ神^レの^レ事^レ依^レり奉^レ給^レへる^レ大^レ御^レ命^レ
を奉^レへり坐^レて^レ其^レ道^レと^レ為^レる^レ御^レ在^レり坐^レり大^レ御^レ業^レへ^レ即
右^レの修^レ理^レ固^レ成^レ是^レ多^レ陀^レ用幣^レ流^レ之^レ国^レと云^レ道^レより^レ外^レの^レ道^レ
と^レ為^レ給^レふ^レ道^レ無^レき^レ事^レ所^レ知^レれ^レたり若^レて^レ皇^レ祖^レ天^レ神^レの^レ大^レ御^レ
命^レの^レ如^レく^レ已^レ小^レ大^レ八洲^レ国^レ及^レ山^レ川^レ草^レ木^レを^レ生^レ成^レし給^レひ^レけ
り四^レ神^レ出^レ生^レ章^レに^レ伊^レ弉^レ諾^レ等^レ伊^レ弉^レ冉^レ等^レ共^レ談^レ曰^レ略^レ何^レ不^レ生
天下^レ之^レ主^レ與^レと^レ宣^レひ^レて^レ天^レ照^レ太^レ神^レ素^レ戛^レ鳴^レ等^レを^レ生^レ成^レし奉^レ
り^レと^レ給^レへる^レ天下^レ之^レ主^レ者^レと^レ申^レす^レ天下^レを^レ所^レ知^レ者^レ大
君^レと云^レ事^レして^レ即^レ右^レの修^レ理^レ固^レ成^レ是^レ多^レ陀^レ用幣^レ流^レ之^レ国^レと

有し大御業を授傳へさせ奉給ふ御職の御稱ふ事
申すも更なる御事あり但其心を得有る二柱御
祖神の始の多用幣流之因
と云ふ未水中の渥土沙土の混濁りたる物を云ふ
あり己小田土の成竟たり後小其稱有る唯其田土の
有形を云ふり傳七卷借天照太神ハ高天原素戔鳴等
の始小己小云りき
ハ底根田を所知着べき幽契の御在り坐て以田土小
ハ御在り坐す成ぬと雖も其二柱の御中ハ天忍徳耳等ハ
ハ生出させ御在り坐けれハ主張て天下之主者と
申す可きハ其御子ハ後くせ給ふ事卷首ハ委しく弁
へたるが如し故以御子の生出させ給へるハ就て伊
弉諾大神ハ登天報命し給ひ又其時ハ合せて葦原中

田小保食神の御在り坐て專衣食住り事ハ恩頼を幸
ハ初させ御在り坐す御事ハ成れりけり故以時
小至て其二柱御祖神の御子孫として天下ハ人民稍
多く成以て行く勢あり見えれうけ其天照太神の具
穀物を令取給へり所ハ是物者顯見蒼生可以而活食
之也と宣給へる大御詔を以て伺奉り知る事ハ
ハ諸其天下蒼生ハ各ハ其ハ幸サテと云事有り上章
ハ謂ゆ徳是なり彼海幸彦山幸彦の如く性ハ得て
生るハ有り憶慣ハ馴て得るハ有り其成就ハ所異なり
と雖も各ハ一箇の幸を有タす云人無くハ有り

る城傳四五十一引る大倭国者以行事名国也と云
多名是なり故以天下六十一在と謂ゆる名この人共の交
小幸を成し合ふるむ廣く修理固成是多陀用幣流之
国と云者小い有けるを其人との止小配賦て云時ハ
又一家一人小取て修理固成是多陀用幣流之国と云
者小て皆くく小衣食住の事を設備て性命を保ち子
孫の八十連属小祖名絶す負持て傳ふ可き為より外
の事ハ非るなり一然れハ皇御孫等の天下所知者す
道と申奉るも斯道ハ因て治給ふ御事小御在し坐す
事天照太神り然計り保食神を又無き物小思ひ聞え

させ給へるも然る深き旨有る御事小御在し坐
けり一彼皇祖天神の御命を負持て世を建初給へり
一伊弉諾等の神功既畢させ給ひ天神の報命し給ふと有る斯る事迄の行末を見
届けさせ給へるとあるで得有る御事傳十五
卷下云る事共を合せ考ふ可き事なり右等ハ予ガ空
所小非ず悉く実地を踏て其事を述る小余韻の以小
及べり者あり如以く上下の事の貫きて動く事さ
実理有るを口を掛て有 猶以小天照太神以天狭田長
田為御田時素戔嗚尊春則重播種子且毀其畔秋則放
天斑駒使伏田中復見天照太神當新嘗時則陰放屐於
新宮又見天照太神方織神衣居扇殿則剥天斑駒穿

△又其穿殿覺と云
ハ宮室の害あり

殿覺而投納と見えたる一書終小古事記共小五
粗ハ有れど概して以て云時ハ大夜詞小天津罪止
畔放溝埋榎放頻蔭串刺生剥逆剥原戸と有る是ふ力
若て其畔放溝埋榎放頻蔭串刺の五ハ御回と妨奉給
へる小て食物を害給へるふり生剥逆剥ハ御衣織を
妨奉給へる小て衣服を害ひ給へるふり原戸ハ新
嘗宮を穢奉給へる是宮室を破損ひ給へる小て
皆衣服宮室を妨げ但へ損ひ破れ給へる小在り以
事己く心著れたる人ふり有けり尙部正通至説小
放駒者害殺之惡放屎者穢食之惡剥斑駒穿殿覺而投

納者導殺生壞殿舎穢清服也害食任依殺生者惡行之
根元也云北藤原良公御説少々天下之所重民命
之所係衣典食也其得衣食之道在耕織二事進雄等妨
食者三妨衣者一春耕者重播毀畔秋獲則放天斑駒冬
嘗則放原新宮是三事有妨於食者也太神驚悖而投於
機以校傷身則有妨於衣者也其惡之無状如是と宣へ
カ右ハ口訣纂疏小以章を註する小就て云れたる
説ふるハ何れも目覺る計小愛たらくふり所思えたり
けり右ハ得衣食之道在耕織二事と云其耕織ハ耕
ハ男の業ふり織ハ女の伎ふり共小上ハ引り修
理固成是多用幣流之固と云小當りて今日我人共
小成す所ハ謂ゆる幸ふて以て衣食を得て家

○日本書紀傳十九

○百五

定小安延す事あるが故小深く感け奉る所あり右
小の佳処の事を宣ひされど右に衣食佳の事を
宣たる御説小 備以小由以亮愠乃入于天石窟洞磐戸
あり有ける 所坐居焉と所見たる大抵ハ天照太神の頭見蒼生の
為小右の如く衣食佳の事を整備させ給ひて天津日
継を定奉らせ給ひて御支度ヨシホの半ふる御時ふる小素
戔鳴守小素より以田土を所知者へき御心も御在
し坐ざりた止小保食神の御饗奉られし状の無禮ガ
ふりし小御怒坐つと天照太神小其保食神を
是止事無き者小して傳傳つと給へるを見奉り堪雅
させ御在し坐て然る御荒じの御行共ハ御在し坐け

る小ふい有ける備以て思並神の深く遠く思慮奉
給ひて其日神の大御心を和め奉給へる神謀の御事
ハ以より下小委曲小所見たるが如しと坐も其ハ上
七下小し註るが如く躰オモテの方の一向ヒトムして有けり其幽
の方小妙小奇しき事の有を誰しも深く遠く思慮ウラ
取れる人無きが故小古来其蹟オトコを探知る事能ハざる
を以て其小て漸漸せ置く事小有れども実小知る可
うと不ふい有ける其ハ思並神の深く遠く思慮の至
れる所と云ハ右の如く天照太神の中中 休ソラ小して息
させ給へり衣食佳佳の事を猶其上小も能調へ成し

て仕奉れる不在けり其ハ以ハ五百箇真坂樹小取懸
給へるハ坂瓊之五百箇御統又ハ咫鏡の御事小於て
ハ具御璽実小御在ハ坐セハ甚小可畏けれハ以ハ云
不限小非ハ少次小下枝懸青和幣白和幣と有ハ第
三一書小下枝懸以粟田忌部遠祖天日鷲所作水筥と
所見ハ古語拾遺ハ殊小委曲小令長白羽神伊
田麻績祖今俗衣服種麻以為青和幣古語尔 伎氏令天日鷲
謂之白羽以縁也
神造水綿津叩見神穀水種殖之以作白和幣是水綿也 以上二物
一夜蕃一也令天羽追雄神倭久遠 祖也織文布令天棚機姫神織
神衣所謂和衣古語尔 伎多倍と記されたり以ハ青和幣白和

幣荒妙和衣の事ふるが以時小至りて全く備ハ此
ハ右の度ハ御償ふるが如何小とる為ハ又上七下
ハ右機殿後式帳小皇太神御座高天原之昔人面等之
遠祖天八千之姫殖菜葉於天香山以所繫之御糸織供
進御衣於太神と有ハ八千之姫ハ以第ニ一書小謂ハ
ハ初度ハ女等の御事小ハ神宮雜例集小於神御衣勤者
掛長天照坐皇太神御坐天原之時以神版部遠祖天所
梓余為司以八千之姫為織女奉織と有ハ其度ハ天棚
の事を係ハ傳たりハ者ハ又ハ八千之姫ハ天棚機
姫神と一神小坐て曰ト事ハ前後二度共ハ社奉れ
ハ者あり又右の拾遺ハ文ハ全ハ天日鷲神造水綿津叩
見神穀水種殖之以作白和幣と有ハ水綿と白和幣と別
あハ非ハ水綿を造ハ穀木を津叩見神小令種て白
和幣ハ作れりハ云事ハ津叩見神ハ唯其穀木を殖
給へるハ生初ハを解糸と云ハ同ハ義ハ神名ハ云ハ如
上二物一夜蕃也と有を證として心得べき者ハ

借右小放辰於新宮と有り又穿殿莞ハ宮室を妨奉り
損ハセ給ヘラカリ以小因て以御禱の御時の供奉
レテ謹有り古語拾遺ハ右小引ヲ並小令手置帆負彦
狹知二神以天街量大ハ小ハ儀大峽小峽之材而造瑞殿
古語美豆能兼作御笠反矛盾と見えたり是カキ若て
美阿良可其後小爰令天手カ雄神引啓其扉遷座新殿則天兒屋
命太玉命以日御綱今新利久連廻懸其殿令大宮賣
神侍於御前是太玉命久志備所生如命世内侍豊磐間
戸命楯磐間戸命二神守衛殿門是並太玉と有て先小
ハ宮殿を造構ルカ事を云ハ以小ハ其新殿小遷奉

りて其令任奉れり御事を記されたり者不リ已小
上五丁云云如く彼新嘗宮ハ係食神の仕奉り初
給ヘラを全く工匠コバクミを定めて世ハ宮室を造る事の以
カ在る皆右小報奉る所為多を思ハ可但大宮賣
玉命久志備所生と云ハ楯磐間戸命豊磐間戸命を是
並太玉命之子也と書セカハ少ク論ハ有る事カレ
ハ其事ハ別カして唯以の右件衣服と宮室との御事
事實の上をのこ見カ可カ所見たり然る小御食小就カ説ハ全小無カ如
と云ハ必有りテ謹カハ今見出たりける其ハ古語拾
遺ハ殿齋門奈者元太玉命供奉之儀と云事ハ有ハ右
の新殿ハ出来カ一時小仕奉ルカ業カ事著明カ然

る大殿祭詞を見る小其詞別小皇御孫命朝乃御膳
乃御膳供奉流比禮懸伴緒強懸伴緒キ手蹟足蹟不
令為区と有、其詞を毀固小於て用ゐるか故小皇御
孫命と申換たる小こる有べかりけれ太玉命の供奉
り給ひ一時小ハ皇太神の御事を詞小申て加へられ
たりけり一如以く大殿を祭らるる小御膳の御事を
申せり、彼新嘗を穢し奉りし其御政の息ぬるを以
不起して仕奉りければ然る御事の出たる小
有ぬ可りし其ハ四十一九下小正し言證共小刺て云
る如く先の新嘗の御時小事始て以天原小て天照

太神の朝夕の大御饌を供御せ給ふ神保食神の
御饌都神と御在し坐て仕奉りせ給へる御事あり有
れば此御時あり猶更なる御事あり御在し坐つ可
りゆけり但右引る古語拾遺ハ麻穀を以て上二
物一夜番茂也と有る程の事ありければ彼
畔放湯埋樋放類等事刺るなり如く御營田の御事共
係れり御過を補奉る程あり未至くさゆけり
故右の如く素美鳴尊の妨け損らせ給へる衣食住の
物共を悉く成し償奉りて以前日天照太神の御自
食させさせ給へるより猶弥増し勝りたる物は整
備して仕奉りて凡世中在りる限り皆其御時
供奉れを常典として通く用ゐる物と成りたる此

坐振髮以贖其罪亦曰振手足之凡贖之

を以て顯見蒼生を活し養ひ世給ひむと所思あり坐
る皇太神の大御心は叶奉りて終に磐戸を出させ御
在り坐り至れりしは此は然後諸神歸罪過於素戔
鳴尊而科之以十座置戸遂促微矣と有る其事を以第
二一書より已而科罪於素戔鳴尊而責其被具是以
有乎端吉彙物足端凶彙物亦以啗為白和幣以漬為青
和幣用此解除竟遂以神逐之理逐之と見えたる此解
除の驗は依り素戔鳴尊より實は此天眾を犯給へ
る以前は天照太神の方知素戔鳴尊元有赤心と有る
其時^{（ウ）}變^{（ウ）}勝^{（ウ）}りし御心清りし大神と成り世御

在り坐り此顯國より無上至尊に御功坐す御事
然る物より已く此は根差し初たる吉事あり所見
世御在り坐りける其は傍より令成り奉りし事より
は有るは白和幣以漬為青和幣の為字は化
字の義より此物を以て彼物の化すを云るより啗漬
を其るがごとく白和幣青和幣と云成すより^{（イ）}此^{（イ）}可
け水は啗漬の物變りて右の二物に成れりある可
又此は就て思ふは此は振髮と有る下より引く空劍出
現章第五一書より所見たるが如く其大神の毛髮より
樹木^{（ド）}の化出れるを思へば已く然る御功の起る可

基ハ此解除ヲ因テ起シ出初ケル然レハ手足ノ凡
ク物リ化出タルヲ傳無レハ今知テキ何レ
ト右ニ准ルヘテ事ヲ趣ヲ曉テ可ク下ニ云々五
十猛神青幡佐草日子命備第三ニ書ク素戔鳴尊逐ハ
ル給ヒ後ニ再天上ニ參升ル御在坐御事有
於是素戔鳴尊白曰神曰
吾所以更昇來者衆神處我以根國今當就去若不與
卿相見終不能忍離故實以清心復上來耳今則奉覲已
訖當隨衆神之意自此永歸根國矣請毋照臨天國自可
平安且吾以清心所生兒等亦奉於卿已而復還降焉ト
見えたるハ傳十五三百ニ註テカ如上章ニ天照太
神ノ物根ト推テ故彼五男神悉是吾兒乃取而子養

焉ト有一御事を和ス奉ル給テ御言マテ日神
ノ天上を所知者一己尊ノ根國ニ入御在一坐ニ就テ
ハ国土ニ大君ノ御在一坐ニ御事ニ深く御心を係
させ給ヒテ天津日冠ト其天忍穗耳尊ヲ天降シ
奉ル給ヒ心事ヲ此ニ御契約有ル給テ御在一
坐ニ又此ニ合セテ其第一一書ニ乃以日
神所生三女神令降於筑紫刑國教之曰汝三神宜降居
道中奉助天孫而為天孫所奈也ト有レ此素戔鳴尊ト
屬テ先天降一置セ給ヒ其天神御子ノ御為ニ
豊受大神ヲ所奈ル給ヒ其大神ノ顯見蒼生ト

皇天皇三年為地
 月神者入謂之日
 我祖高皇產靈尊
 有陶器造天地之功
 其地奉我月神若依
 諸國我當福慶之有
 此國之造也給
 奉之給之由之也
 思之可也又

予謂の修理國成是多陀用幣流之國と有る御言を
 戴持して此國を建給ひて天神御子と所知し坐る
 奉るに給ひて御結構の御在し坐るに有るに有るに
 第五一書曰素戔鳴尊曰韓郷之島是有金銀若使吾見
 所却之國不有淳宝者未是佳也略と有るに國引の御
 心と皇國を善成し給ひて御心を益るに有るに見
 えさせ給ひしに欽明天皇十六年神紀曰百濟王
 宣ひ諭し給ひて事の中曰原夫建邦神天地割判
 之代草木言語之時自天降來造立國家之神也と有るに
 鈴屋大人曰玉勝間曰建邦神と申すに素戔鳴尊曰御

在し坐る由に云水たるに右の一書共み據て証
 さ水にたる事あるに實に然る言あるに其國引
 の御業より及ちて萬國の皆を建さ給ひて御事
 決くあるに有るに其全文の昔在天皇大泊瀬之世汝國
 祇伯敬受策於神祇祝者迺託神語曰原請建邦之神往
 救持己之主必富國家謚請人物又安由是請神往救所
 以社稷安寧原夫建邦神者云と頃南汝國較而不祀方
 今悛悔前過修理神宮奉祭神靈國富昌盛汝當莫忘と
 有るに皇朝の事知看す本より百濟の猶更に知らば
 少し事共るに程の漸此の神託に依りて所看し初
 らせ給ひて程の御事より百濟の三韓の一に義あり
 坂を接へたる國あり其國限を建給ふに云義あり
 有るに給ひて新羅高麗の更なり其餘の諸國をも建
 せ給ひて神の御在し坐るに百濟の國成り振
 成りて為るに今祭給ふ所より警へるに皇國ありて
 其一回の為るに二柱御祖神を祀るに心ばへるに同ト
 〇日本書紀傳十九
 〇百十三

可き事あり能為ずハ混ハぬ可シ師説ニ西式ニ天地
人ノ三皇有リ其天皇氏地皇氏ノ葛洪枕中書ニ元
始天皇ト太元聖母ノ間ニ生メテ云テ歸妹ノ神有リ
ガ其元始天皇ハ高皇產靈尊太元聖母ハ神皇產靈尊
ニ當リ天地ニ皇ハ伊弉諾尊伊弉册尊ニ柱ニ渡ルセ
給ヒ人皇氏ハ其二皇ノ子ト有リハ素戔嗚尊ニ坐ル
ガ春秋命歴序洛書靈准聽ニ人皇氏九頭九男相
像其身九章故曰九皇矣雲祇車駕六提羽而出谷口分
汎河依山川土地之勢裁度為九州謂之九國因是而區
別各居其一故曰居方氏人皇乃居神州以制八輔此各
洲之始也ト有リ九頭九男ハ其分形を云ハ雲祇車六
提羽ノ乘騎ノ具ト我ガ天警船ノ類多リ谷口ハ扶
桑神州ノ鳴谷を云フ分九河依山川土地之勢裁度為
九州ハ靈准聽ニ萬山氏産山谷ト云リ二神國生メ
遺傳多リ又山川形勢集裁為九州ト有リ合考ルハ國
土之始ハ瀨田五岳を立テテ謂ル泥濘多ク漸ニ山川
天皇氏ハ天柱五岳を立テテ糸織國ナリ漸ニ山川
海陸ノ形成ナリト人皇氏ノ裁度シテ九國ニ區別
シ九州ト為給ヘルナリ各居其一ハ其分形各其一方
ニ居住シテ其洲ニを修リ固むルニ自己ノ本體ハ其

中州たる所ニ居テ分形ハ八輔を制馭セズ由多ク其
九州ト云ハ世説ハ大九州ト地球ノ全を云フト云
水たるハ實ニ然ル言あり右ハ赤縣太古傳ナリ其
要ト有リ事ヲ抽出セズあり其中州ト云ハ我ガ皇
國ノ事ありナリ叶ハズ此ハ亦混ヒ易ク事あり其心
ナリ可キ事多ク何れニシテ此ハ古説ナリ合テ床
共あり復説ク素戔嗚大神ハ右ノ如ク國を引テ建給
ヒテ其地盤を美成シ給ヒテ先ニ過犯シ給ヘリ御
事共をハ悉ク起シ給ヘリ備其大神ノ御子等ノ多ク
御在シ坐中ノ大國主神ハ其御功業を受冠セサセ
御在シ坐テ國土經營ノ御功坐ナリ申サモ更ナク御
事あり其素戔嗚大神ハ御自モ物為サセ給ヒ
御子神等ノ配分テ其天上ニ損破ルセ給ヘリ

衣食住の皆を此国上より悉く善成し置せし給へ
り下り載り初五十猛神天降之時多將樹種而下り有
る中引天香山の桑も必有る可事云より更なり又傳
十五三百三十二下云らるが如く彼共天降り坐し三女神
も織タナハ女メ神カミも織オリ幡ハタ神カミも申奉る御名御在り坐る
は此国土より始り織経の事を起させ給へる由り
りこり所思えたりけれ若く出雲風土記大原郡高麻
山條に古老傳云神須佐能袁命御子青幡佐草咄命是
山上麻蔭初故云高麻山即此山峰坐坐其御魂也と又
楯縫郡神名槌山の下の阿達須根高日子命之后天御

梶日女命と申す御名坐る梶の木名も古語拾遺に
謂ゆる木綿の造る穀木も右の麻は此穀との二
て即青和幣白和幣なるを知り即右に引か云るが
る素戔嗚尊の神逐り水の所を以て陸為白和幣以て水為
青和幣と所見たり其時御心の清ししく淨なり
竟り給へる神驗此に至り次は食物の御事より宝劍
出現章の所見たるが如く素戔嗚大神の后神を奇稻
田姫命と申し又出雲の清地に宮を建て相與造合し
て見大己貴命を所生坐る其見宮を稻田宮と云ふ
由見え又古事記に速須佐之男大神又尊大山津見神
之女名神大市比賣生子大年神次宇迦之御魂神二柱

と有る神宮の古書に宇賀御魂大年神と見え一神あり其大年神の御子の向日神御年神と別々成出給へれども傳十四百四十一向日神社記を引く云るが如く亦名の二所に出たりて其實は同神あり又其大年神の御子の羽山戸神あり羽山戸神娶大年都比賣神生子若山咋神次妹若次那賣神次弥豆麻岐神次夏高津日神亦名夏之賣神次秋毘賣神次久々年神次久々紀若室葛根神と所見たる大気都比賣神は彼保食神の分魂に坐と聞ゆるが其神は娶て御子若年神を生坐る神に誰に坐む上件大年神御年神若年神

指次を以て羽山戸神の別神あり御在坐すて決く御年神の御在坐す事知る故祈年祭詞に御年皇神等能前ふ白久皇神等能依左奉年奥津御年字八眩ふ水沫畫密向股ふ泥畫寄取作年奥津御年字八東穂乃伊加志穂ふ皇神等乃依左奉者略々有り上十二引る古語拾遺の趣を見れば己日農作の神として大地主神の持齋と世御在坐を以てて世は稲穀を幸給ふ神の御在坐を知心は彼天照太神の御營田を妨て天罪を犯し逐はれ給へる素戔鳴尊の御子御孫御曾孫とて共々御年皇神等と祀はれ給ふ

事少縁の御功ありす。御事を多む想像し奉る可
うゆけ。又上二十丁に引る出雲風土記、飯石郡須佐
佐田定給故云、須佐と見え、楯邊郡玖潭郷條、所造天
下大神命天御飯田御倉持造給並、見巡行と有る。天
御自南御神科、御田の事あり。有るは、世に幸給ふ御
幸皇神等の例と異ふ。然る農作の御事、少勞
づるに給へり。其空屋の御事、御功を立すに給へり
し證、共有り。御事ハ宝劔出現章第四一書、素戔嗚尊帥其子五十
猛神降到於新羅國略初五十猛神天降之時多將樹種
而下然不殖韓地盡以持歸遂始自筑紫凡大八州國之
内莫不播殖而成青山焉所以稱五十猛命為有功之神
即紀伊國所居大神是也。見之其第五一書、素戔嗚

尊曰韓鄉之島是有金銀若使吾兒所御之國不有浮宝
者未是佳也乃拔鬚鬣散之即成杓又拔散胸毛是成檜
尻毛是成被眉毛是成檮樟已而定其常用乃稱之日杓
及檮樟此而樹者可以為浮宝檜可以為瑞宮之材被可
以為頭見蒼生與津彙戶將卧之其夫須噉八十木種皆
能播生于時素戔嗚尊之子號曰五十猛命妹大屋津姬
命次梳津姬命凡此三神亦能分布木種即奉渡於紀伊
國也。所見たり殊々此傳ハ上下事の行足ひて萬
二欽たる事無く物為り給へり。浮宝ハ船の事
ありて外國の土物を令貢給へり。科あり瑞宮ハ彼天照

公披^い_い^ふ一種の木有
を字常^い木^い以^い杖^い
有^い是^いふ^い又

大神子奉給へり天神御子の天降坐て大宮柱太敷
立させ給ひむ事を詔給へりあり桑戸ハ借字して大
嘗糸式造大嘗宮條日正殿一字構以黒木嘗以青草略
地敷束草上加竹簧其室簧上加^{スノウヘ}席^{ウレロ}席上敷白端御帖^{ヒシクミナラ}
有^い簧上^い同^い謂^いゆる床^い上^いて人の寝伏す所を
云あり古^いを古^いより棺^い擲^いの事と云るハ顯見蒼生を家
内日安居せりめ給ひむ神慮を知奉るが^い愚説共ふ
り檜を宮材と為る日對入て椀を民屋の料に充給へ
る者あり和名抄に椀玉篇云椀^い音^い椀^い日本紀私記云未
注^い木名作椀埋之能^い不腐者也^い有^い如^い山^い杉^い一名^い日

し^い船材屋材に並て用ふるハ右に埋之能^い不腐^いと云
を以てあり凡て皇國^いの甚^い多^いき物^いにて專青垣山成
せり是^いを以て真^い木^いと云ふりけり万葉一^い
二^い上^い日真木佐苦檜乃孺子^いと云て下^い日真木乃都
麻子^いと二^い真木柱太心者^い二十^い一^い日麻氣波之
良寶未豆久禮留等乃能其等と有るハ檜を云ふ
ハ三七^い日真木柱作蕪麻人伊左佐米丹借盧之為跡
造計米八方十一^い五^い日奥山之真木乃板戸字押向思
惠也出來根後者何持為又^い四^い日奥山之真木之板戸
字青速見妹之當乃霜上尔宿奴十四^い一^い日於久夜麻

能真木乃伊多度宇等持登之此和戎比良可武尔伊利
伎氏奈佐祢々有民屋の状あるのをもあらず中古の
歌より多くコキヤ榎屋と詠ふ類是あり檜杉枝共々廣く云
時、真木と云事常より此を以て杖可以為頭見蒼
奥津桑戸將卧之具と有、右の木共を以て民屋を造る
可く掟させ給へるを知べし此又思えず右の桑戸の
事、就て長説して有け
る事、速無ハ然ハ此生を好む死を惡まじ給ふ神
等の今日居候べし家宅の事を除て棺槨の料、材を
充給ひぬと云理の有りも非ら上、此事を能く
説知せずして頭見蒼生の為、如此迄、怨到、物為
させ給へし善ハ、所業共の隠るを以て止
む事を得ざるが故あり備右の毛髪より如此く樹木
の生出たる事ハ、上九下、引る此章、至、使、髮、以
贖其罪と有、解除の時、己日其発端ハ有初つる

あむ有 如此く素戔鳴大神の物事を能く成し置させ
けり 世御在し坐て大國主神の天下經營させ給ひしめ給
ひて底根國に入給ひて先、所思ふやが如く伊弉册
大神は仕奉らせ給ひ又其御魂ハ月國に渡らせ給ひ
て月夜見尊と祢奉りて後、天照太神の御子の天降
坐し就てハ皇御孫尊の現事顯事を所知有し大國主
神ハ神事出事を所知有す御事と成て天照太神の御
子の月夜見大神の御子の二柱は特別て此顯國を相
保有ソモク世御在し坐す事猶天照太神の天原より御照し
坐し月夜見尊ハ月國より御照し坐して顯國の晝

夜を持分けり所知有すと同趣あり御在り坐け
る若く其顯事函事共く唯入り上り邪正曲直を弘給
ふを主と為るより非ず天下蒼生をして謂ひて修理
固成是多危用幣流之國の大本を所知有す御事より
御在り坐ければ其極あり命續ぐ食物衣服住家の
事を守り物為させ給ふより外無しゆる故岳仁天皇
二十五年御紀より出たり大倭大神の御言より皇御孫尊
專治葦原中国之八十魂神我親治大地官より見えたり
治八十魂神より天孫降臨章第二一書より高皇產靈尊
勅曰吾則起樹天津神籬及天津警境當為吾孫奉齋矣

汝天兒皇命太玉命宜持天津神籬降於葦原中国亦為
吾孫奉齋焉と有る其より即祈年月次新嘗等祭詞より
高天原^ル神留坐皇睦神漏伎命神漏弭命以天社因社
登稱辞竟奉皇神等乃前^ル白久と有る其辞別の終より
故皇吾睦神漏伎命神漏弭命登皇御孫命能^ル宇豆能^ル幣
帛^年稱辞竟奉^久宣と有る是より偕祝詞講義に註
如く高天原の事始り常典と為り仕奉給ふ年中の御
祭の衣食住の事の御祈りあり二月祈年六月十二
月月次九月神嘗十一月新嘗等の穀物の御祈り食
物の御祭より四月九月神衣の衣服の御祭より六月

十二月大殿祭御門祭鐘六道郷食等、住處、就たる祭祀
 又二季大祓、天津罪と云、彼衣食住を妨損入
 るを罪の尤大なる物として、解除の事あり、年中
 の恒祀如此く大抵衣食住の事、係りるを、専要
 と為させ、御在し坐て皇御孫尊の天下所知看すと申
 奉る、あむ天下蒼生、為る八十魂神を治給へ、御政
 日御在し坐ける彼八洲起元章第一一書、天神謂、伊
 弉諾尊、伊弉册尊、有豐葦原千五百秋瑞穂之地、宜汝往
 宿之、と有る、御旨、約さる、外無、者、あり、此
の事共、己、四神出生章第十一、一書、就て傳十四卷
の巻末、よ、云、し、事、あり、有、れ、よ、此、よ、主、として、説

第一一書、其、神、制、
 班、駒、の、後、は、故、天、照、太、
 神、謂、事、を、傳、言、す、曰、
 猶、有、黒、心、不、敬、與、以、
 相、見、と、見、え、れ、ら、ぬ、此、
 ち、を、禊、と、謂、あり

く衣食住の事、此宝鏡用始章、あむ其起伏興廢
 の一大段、あるが故、其終始を能明く、め究め、る時
 此の真旨を、伺知奉る、可く、さるを、以て、此、を
 長説、い、為、り、け、る、能、く、照、し、應、せ、て、其、然、る、所、以、を、曉
 め、て、よ、○、由、此、右、日、剝、天、斑、駒、穿、殿、毫、而、投、納、と、有、る
 此事、由、て、あり、第一一書、又古事記、趣、右、同、十
 書を、第二一書、より、新嘗を、穢、し、奉、り、る、事、を、因、り、て、傳
 あり、上、九、十、一、下、日、雜、に、と、が、如、く、誤、あり、○、禊、愠、ハ、美、伊
 加理座坐、此、と、訓、べ、し、第二一書、より、故、以、恚、恨、逆、居、于
 天石室、南、其、磐、戸、と、見、云、古、語、拾、遺、より、其、後、素、戔、鳴、神
奉、為、日、神、
 行甚、次、無、種、と、凌、侮、略、于、時、天、照、太、神、赫、怒、云、と、有
 此、と、古、事、記、より、故、於、是、天、照、太、神、見、畏、云、と、有

故難然為天照太
神者登賀未受而
告

て却怒の御事無し然れども其上は如景醉而吐散登
我那勢之命為如此又離田之阿埋清者地矣何多良斯
登許曾我那勢之命為如此登詔雖直と見えたるは却
營田の事と大嘗との事と依てハ登賀未させ給はば
るふり然るは此生剥逆剥の事に至てハ詔直させ却
在し坐ぶるは己日登賀未させ給へるはて見畏ま也
給へるはこよハ非不可一第二一書ハハ此諸事盡
是無狀雖然日神恩親之意不愠不恨皆以平心容為と
有ハ同詔直の事ハ在を登賀未受ハ不愠ハ字を被用
はるは此ハ怒愠ハ照應せて其狀を考ふ可事あり

考案十卷八下温
下二下下温見
下有皆伊加理
訓

伊加流の事ハ傳十四九十九日云り愠字天孫降臨章第
氏と訓るを海宮遊行章第八一書ハハ愠字を於母富
傳理氏と有り又古語拾遺ハ赫然を武烈天皇御紀ハ
ハ覺父子無敬之狀赫然大怒と有り於母富傳理氏
と訓ハ伊加流ハ氣上於母富傳理ハ其氣ハ上ハ依
て面ハ大照る事ハ言ハ別ありと目ト我ハ言
ある故ハ右ハ如く兩訓有るハ又第二一書ハ惠恨ハ
四神出生章第六一書
○天石窟ハ一書共又古語拾遺
舊事紀ハ皆右日同トを古事記ハ天石屋戸と有
ハ此ハ天石窟ハ次ハ警戸とを一日合せ云るあり天
孫降臨章ハ稜威雄走神を天石窟所從神と所見ハ
るハ古事記ハ坐天安河河上之天石屋と有て此ハ
ハ別ありとハ天石窟ハ例あり先ハ新宮ハ新嘗ハ

給ひ又齋服殿に神衣を令織給ひると尋常の宮殿に
 御在し坐けるを此の其宮殿を逃出給ひて實に石窟
 の裏に御石隠れ御在し坐けるあり下百九十の云々
 の如く予の雄神の亦名を天石戸門神と申す此御
 戸開日因水の御功成就て御名を古事記御天
 降段に天石戸別神亦名謂攝石窟神亦名謂豊石窟神
 此者御門之神也と所見たるに御門祭詞に攝警備命
 豊警備命登御名予申事故四方内外御門如湯津警
 村久塞坐此と有る此の御警備命も其實の警戸
 を開給へるに因水の神名を以て此の天石窟

此の天石窟の事
 天香山の事
 神事
 神事
 神事

の真に石窟ありし事を知らざるあり
 昔に伊弉諾尊已至泉津平坂故使以て予人引磐石
 塞其坂路と有る此の及て鎮火祭詞に謂ゆ伊
 弉冉尊の石隠坐し其穴を塞ぐ事あるを次に所塞警
 石是謂泉門塞大神也と有る道續祭詞に因此起水
 者ある事傳十卷に己に註る如し然るに其詞に
 大八衢尔湯津警村之如久塞坐皇神等之前尔申久八
 衢比古八衢比賣久那斗止御名者申此と有る其泉國
 の通路を予人引磐石を以て塞ぎ阻たると因水の
 神の坐れるに右の所因を以て衢神の祭を以て
 此より其實の御石の在るに警備の取れるに同ト
 可なり石窟の石屋にて警石の裡に身を容る計に
 有て住る可き所を云ふり今例を云ふに出雲風土記
 島根郡加賀神埼即有窟高一丈許周五百二步許
 東西北通と有て其加賀郷の下に佐太大神祈産

状を以見れば疑くし大石窟より如何にして細
目にて用て奉らずして石根引く手力の神り云
へども容易く排開き奉り難くし程の御事とある
所見たりける
但右の石室を伊波牟呂と訓むる
年呂又須美加又保良又保流又伊波牟呂と云訓有り
又和名抄密和名伊波夜説文云密上屋也一云堀地為
之と有り高字を五車勻瑞の穴居也増勻の密也と註
せるは同トくして古の穴居の状に當て土屋也と云
るは此の石室の磐石を以て成せること異あり又
文選の石龕と有るも伊波夜と訓し傳八卷の天
石屋戸の必しも實の岩窟の非ト石の唯堅固
を云るもて天之石位天之石毅天磐卵と云類もて
尋常の殿を云ふも可し云くと云はれ水も此も
ハ真の石窟なるはこゝ然書水たるも有り此若唯
堅固の殿ありと古事記にも南大殿刺許母理坐
也と作る可き者あるを其天之石位の事と云べ

事有れば其の天孫降
臨章天磐座の傳と云べし○入の古く入坐氏と訓
は從ふ可し天照太神の常宮を出させ御在し坐て其
別處に在る石窟中に穿り入せ給へるを申すあり誰
も知れずか如く入の出の對するは他より來るも
有れ我より行くも有れ其出たる方を專として云
語あり然れば入の往在の約れざる可し御紀の所
見たる一二の例を云はば四神出生章第六一書に伊
井諾尊追伊井丹尊而入於黄泉及之云云天孫降臨章
に鹿葦津姬忿恨乃作無戸室入居其内其第二一書に
入其室中以火焚室第五二書に益根作無戸室入居

其内ふと見え海宮遊行章日彦火火出見尊の幸行
所日海神於是鋪設八重席薦以延内之其第一の書
作大目鹿籠内火出見尊於籠中投之于海其第四の
書日乃設八重席迎入坐定因向來意とも有り又神武
天皇御紀日兄猶が逆状を令察テ爾所造屋尔自
居之因案劍響弓逼令催入又道臣命歌日於佐苗逆於
朋務露夜珥比苔瑳破而異離烏利苔毛比苔瑳破而枳
伊離烏利苔毛略下有伊離是より此ハ能人の常
註す日及ハヤと雖も其能知れしと思ふ事ハ思ハ外
能知ざる事有る者ありハ云より右の如く入又内
外ハ納をも盛をも容をも伊流訓ハ事あり又出
對して邊を訓日又射鑄熱共日同語あり和訓案

琉球より深奥の所を凡て伊理と云ふ入の義あり
と云るを見て田村長柄云けく我出羽国にてハ
山の奥より唯入るも又山入とも云ハ海の入
海あり所も唯入るも又山入とも云ハ海の入
方言皆然○磐戸ハ磐石の蓋あり古事記日ハ天石屋
戸と有ハ其事の委しきあり上り此云ふが如く手力
雄神ハ此時の御功用に依りて天石戸別神と亦名日負
坐るも實ハ石窟あり故に磐石を以て戸に當た
りハ故あり已日引たりハ万葉三見三穗石室
作歌の中日石室戸尔立在招樹と詠日又此日引り
可畏くハ有れども同卷四下日河内王葬豊前国鏡山
之時手持女王作歌日豊国乃鏡山之石戸立隠尔計良

思雖待不來座又石戸破手力毛欲得手弱寸女有者為
 便乃不知若と有るは此の故事を葬處の事と取成
 して詠る者よて其の傳九鎮大奈詞を十引て云ふ如く伊
 井丹尊の御自石隠れ御在し坐て黄泉國は幸行る事
 の有しを人世と成てり死たる人を石棺に葬る者子
 らが故に其石隠れ名を借て倭姫命世記に自退尾上
 山峯石隠坐と云ひ万葉二三十三高市皇子尊城上濱宮
 之時歌に久堅能天津御門宇懼母定賜而神佐扶跡磐
 隠座を有る故に常の石隠と云々其此持込て右
 の如く石戸立又の石戸破と詠はれし者なり
借此
天磐

石蜜の御事と彼伊井丹尊の石隠れ共の現御身の上
 時歌に天皇之敷座國等天原石門宇神上座奴
 ども己く詠む事なり成る者あり然れども其可
 畏き御事共あり有る又大祓詞に天津神波天磐
 供はる門宇押披氏と有り記傳に云水たるが如
 く天神何時の岩窟より御在し坐て非れは此
 と倭姫命世記に天磐戸乃鑰預賜利豆と有る堅固
 き御戸の事を申せざるは此の磐戸の
 天石蜜の御戸あり正しく磐石を云ふなり○南磐戸
 而幽居焉の古事記に問天石屋戸而刺許母理坐也と
 有る依て南を多氏氏と訓と幽居焉を刺許母理坐也
 と訓とさるなり此南字を此にも古語拾遺にも佐志氏
 と訓と第一一書に南着磐戸焉と有る佐志都第二一
 書に南其磐戸と有る佐志奴第三一書に南居于天石

屋と有を許母理坐と訓れ此は必多氏氏と云
 てハ下ハ幽居焉ハ續き悪ク少け此ハ記傳八十六
 万葉三十四下ハ豊国乃鏡山之石戸立隠尔許良思と
 有る立ハ闔之事を云り今世ハ云言ク少借闔を立
 と云事ハ師賀茂説ハ上代ハ戸を常ハ傍日取退置
 闔むとてハ其を持来て立塞ク故多クと云此ハ後
 世ハ遺戸ハ此を便能ク為成ハ物多ク可ハ今俗
 ハ戸障子ノ類を建具と云ハと云ハ南を多氏氏と訓れ此
 然言多ク今其從ハ少姓氏録ハ阿居アケ大都命と申
 才神名ハ南闔ハ事を立少給不意多ク同録左京神別
中大神

小見云又古語拾遺
 日臣命即來日部
 衛護宮門亨其闔
 闔と云

大和物語ハ
 依心て明アケ
 九バ云

大伴宿禰條ハ衛門開闔之務於職已重と云事ハ有ハ
 闔を立と云不證共多ク又祈年御門祭詞ハ朝者御
 門南奉夕者御門南奉氏と有る開多クハ多氏と訓む
 所ある是多ク但名義杖を見ルハ開を登豆トモ加多
 とも保能加奈利志トモ布佐賀流トモ許年トモ布佐久
 とも有ハ共ハ多都トモ云訓無ハ雖も登豆トモ多都トモ音
 の通ハる
 ○幽居を古事記ハ刺許母理坐と云ハ合セ
 訓ハる刺ハ御紀ハ右ハ如ク開を多く佐須と訓ハ
 更あり万葉多クハ此彼見ハ記傳八十六ハ刺ハ闔
 たる戸ハ物を刺テ固むハ云ハ万葉十二一ハ門
 立而戸毛南トモ而有字又門立而戸者雖闔トモ有ハ此ハ

多都流と佐須との差有る事を知べし又二十
 一丁 小久留亦久枳作之加多米等之と有ハ戸の櫃ニ釘刺
 固むるあり又十六丁十五丁櫃亦鑢刺藏而師と有を
 和名抄ニ鑢子を藏乃賀岐と有れども今俗ニ鑢と云
 物多師ハ右ニ仕卷ノ歌ニ依テ久岐と訓れき實ニ
 古ハ然テ云つゝむ清寧天皇御紀ニ遂取大藏官鑢閉
 外門式備予難と有り和名抄ニ扁度佐之と有る此も
 戸を刺固むる物ある故ニ名多しと有り又万葉十一
 二十丁 不往吾来跡可夜門不向十二丁八丁今夜將至屋
 戸閉勿勤ありとの類ハ立る事を云すして刺固むる意

を以て廣く云るあり第一一書以下ある皆其義あり
 因云右ニ引水たり和名抄ニ鑢子を藏乃賀岐と有ハ
 揚氏漢語抄ニ説あるが古事と聞えて名義抄ニ有
 鑢子を然訓と又加那岐と也忍加志とも加奈豆賀理
 とも久佐理とも金具佐理とも藏乃筒乃志多とも有
 りハ賀岐ハ加那岐を切て云るあり後ニ鑢と云物
 出来水と云分て其を久岐と云ニ其ハ貫通中物を
 賀岐と云目出出来水と者あり可一同抄ニ右ノ清寧
 天皇御紀ニ鑢閉ノ字を登還又登還氏と有れ其も
 金木を刺て閉が固めたりあり可一同抄ニ關木と
 云ハ金木ヲ轉れりありむ和名抄門戸具ニ説文云
 關以横木持門曰關所以閉也俗ニ貫乃木と云るハ已
 く其唱を記しありあり大祓詞講義天津金木ノ下
 考合す可し 幽居ノ字ハ古語拾遺ニ有り古事記
 云ハ此ニ刺許母理坐と有て下る天照太御神ノ大
 御言ニ因吾隱坐而以為天原自闇亦葦原中國皆闇と

公上引方葉三如
 上皇國了鏡山之石
 戸五隱字計良思雖
 待不來座上有之隱
 此を取し海内
 事を更し傳

有る、^{コモリ}隱字を書れ此より吾比閉居石室と所見たり
 許母流ハ奥在り義多可景行天皇十七年御紀大
 御歌ニ夜摩苦波區珥能摩倍邏摩多多儺豆久阿烏伽
 枳夜摩許芥例等夜摩苦之于漏破試と有を釋大和
 者國之奥區並立青垣山籠大和麗也と有る是あり又
 雄略天皇六年御紀大御歌ニ舉暮利矩能播都制能野
 磨播略と詠せ給へるを釋籠國也言奥區也と見え
 万葉一十九日隱國乃泊瀬乃川尔と作り又倭姫命世
 記ニ許母理國志多備之國と有る隱と下とを並べ
 云るあり考合す可例古事記高津宮段ニ夜麻登幣

迹由玖波多賀都麻許母理豆能志多用波閉都と由久
 波多賀都麻と云歌有冠辞考と隱水の下増入つ
 あり万葉十一ハ隱處澤泉在石根又^{四十}隱津之澤
 立見尔有石根根毛あり有水の許母理豆ハ隱水あり
 草ありと隱り下行く水と思ふ意を譬へたる者
 取と有る如く猶万葉ニ隱沼隱江隱口隱耳隱居隱
 事ありと隱字あり許母理と訓る事教知らず多在り此
 字の如く天石室の中ニ奥在り入らせ給ひ磐戸を閉
 て鎖固め隱給へる是あり今も磐居の字を許母理遠
 して籠城ありと云ふ籠此の同訓傳八卷に許母理ハ
 隱あり傳此石室戸に隱坐るを神遊坐を如此云あり

あど云ハ例ハ漢意ノ推度ニテ甚トテ邪説アリ若日
神崩リ坐ニサハ此世ハ滅ぶ可シ甚切可畏ト云々
ト云水ハク實○六合之内を久延能字知ト訓ルハ誤
ト然ク言アリ
少阿米都知能字良ト訓ベキ事傳八^{三十}ト云ルガ
如ク古語拾遺ニハ此を六合常闇ト書テ之内^ハ字無
ク備此ハ四神出生章ニ日神ト帝生坐^ル所ト此子光
幸明彩照徹於六合之内ト有^ク對入^テ書ル^ル者ハ
少昂古事記ト尔高天原皆晴葦原中國悉闇因此而常
夜往^ト有^ク當^リテ同ト所^{アリ}故此ハ六合之内常闇^ト
ト有^ク然^ク言^{アリ}ト此下ニ至^リテ是時天照太神聞
之而曰吾比閉居石窰謂當豐葦原中國必為長夜ト見

元第一ノ一書ニ於是天下恒闇無復晝夜之殊ト有^ル
天地^ト全體^トマ^テ云^ズト此國土^トマ^テ晝夜相代^ルト
事^ト云^ルト有^ルト實^トト此後^ノ事^ト古事記^ト於
是天照太御神以為怪細開天石屋戸而内告者因吾隱
坐而以為天原自闇亦葦原中國皆闇矣ト有^ル又故天
照太御神出生之時高天原及葦原中國自得照明ト有^ル
ト如ク天地を兼云^ズトハ事實ト相符合^ボト者ハ
少却^リテ此^ト第三^ノ一書^ト尔ハ是時天^ノ力^ト雄神侍^警
戸側則引開之者日神之光滿於六合ト有^テ次^ニ素戔
鳴尊を噴奉^ル所^ト汝所行甚無頼故不可住於天上亦

不可居於葦原中國と有れば上の六合の天上と顯國
を云事を徴すか如くあむ有ける 神紀の体として
あどもも天地開闢の始を記さるるも先回土の事
を主と為るは國常立尊より以下を正書と委曲と
載るは高天原の神事の却りて一書と出さ
水たるは如く此の天照日太神の警戸と隱給へば
天地共々常闇より事ハ申すも更なる神事あるは
も日月の御光を受奉る國土も晝夜の往代を以
て主と記さるるも皆右の例ありと見ゆ然るも
古語拾遺より右に引る如く始は六合常闇と有るは
下より于時天照太神中心獨謂此吾幽居天下悉闇群
神何由如此之歌樂と有る然るは廣成主よりしてハ
子慮の一夫と 倚右の如く古事記は高天原と葦原中
國とを並べ記さるる高天原ハ即上天よりして天日
の御事あるが其の對して葦原中國として云るは我

皇大御國の事あらず傳十四 二十に註るが如く
國土の全を云るは其を唯葦原瑞穂國と云るハ皇
大御國の稱あるあり然るも葦原中國と云るハ凡て
の大地の名より有るは世の始より彼潮沫の凝て
成りし外國共々未海月如て漂蕩へりしハ凡て
の事實ハ此皇大御國としての有つるも自ら
然る葦原中國と云て外國を交へずして此皇大御國
の稱あるが如くと雖も實は然る可くあむ有る此
よてハ天地と云事を然委細しく分云る者あり通證
は或曰天無二日而我邦獨有此異何也固天無二日而

我邦特降生日神所以唯我邦有此事也略と有るは
問も對も共其意を得ざる者あり如何とあるは天
國より皇國のこの天ふる日國より皇國のこの日
非ず天照太神國より皇國限りの日神は御在し坐
ず皇御孫尊國より皇國限りの大君は御在し坐す共
大地の全万国の悉く仰奉り戴奉る天あり日あり
神あり君ありと雖も天照太神の天石室に幽居し給
へり古昔あり唯善く國形の調備はれり此大
八洲國のあり外蕃諸國の然る傳説は素
より無き若し事あり宣唯皇大御國に限りて然る異

事あり有るは云べしむ右等古傳無きを以ても
外國の開けたるは此より遠く後ありと云事を徴
す可き所あるを然る心着無きこと中々速無き事
ありけり外國の初に國形を善成せり上百十二丁
て天降り給へり後より事あり有けり其より以上
の傳説として全に傳はる事あり苦の事あり遊遊は
又傳はれり如き少考名命あり渡坐て國作り
初に給へり後より事のあり有るは斯る傳あり
外國は有る論は○常闇は古事記より高天原に
皆暗と云ひ葦原中國は悉闇と有て因此而常夜往と
有り此より下ある天照太神の御言は為長夜之所見
たり第一一書は於是天下恒闇無復晝夜之殊と見え

古語拾遺より尔乃六合常闇晝夜不分と所見たり事舊
 紀より此事を記して往常世國と見えたる其ハ高天
 原ハ葦原中國ハ常世國ハ往たりとヤ其ハ記傳ハ
 心得難ク北たりカ如ク古事記ハ常夜往り往と云事カ
 夜ハ所ハ常闇ハ常夜と云カ如ク常ハ夜ハ之ハ晝
 無を云り万葉二四十渡會乃齋宮從神風尔伊吹惑
 之天雲守日之目毛不令見常闇尔覆賜而十五三十
 安波牟日守其日等之良受等許也未尔伊豆禮能日麻
 豆守禮古非字良牟カ有ハ常闇カ例カ九ケ闇ト
 ハ夜満カして夜ハ深クして暗カ状を云カ四四十
 照日守闇尔見成而八二十闇夜有者字倍毛不來

座又六十闇尔夜之穗杵尔毛九三十闇夜成思迷
 匍匐十一照月夜裳闇耳見十二四十久方
 乃清月夜毛闇夜耳見十五二十多此尔守禮杵欲流
 波火等毛之字流和禮字也未尔也伊毛我古非都追安
 流良牟二十四十夜未乃欲能由久左伎之良受カ
 見カ○晝夜ハ字トテ然書カカ倒ハ夜晝ト訓カ
 カ此カ言語カ状カケカ万葉二三十ハ多籠良
 宗夜晝登不云行路字四四十夜晝云別不知九三十
 味澤相宵晝不云十一十九夜晝不云吾恋渡十二
 七日吾戀者夜晝不別カ有カ是カ祝詞カカカ

第一二書カ天下直
 闇無晝夜之辨
 有カ

皇神出生章 三十一
 夜有り又
 皇良海本小且簡
 此云年月六年と
 云ふ細書有るに
 然る諺の有
 けり多可一備
 不知相代ハ此國
 土の事カ就て云
 あり

多く夜之守日之守ヨノノモリヒノノモリ有り鎮火祭詞ニ夜七夜晝七日
 と有り景行天皇御紀系燭者歌ニ伽餓奈倍氏用珥波
 虛ニ能用比珥波苦鳩伽鳩と有り日ニ並氏夜者九夜
 日者十日ありふと如此云不格ニ如ク所聞ハ此等
 ハ陰陽を賣衰と云ハ日月を都紀比と云ハ妹妹と云
 ハ夫婦と云と同ト云状あり 然ルニハ天孫降臨章
 ニ有る古事記ハ八日夜八夜以遊也と云レハ
 一概ニ定む可ク雖モ今ハ例ハ多ク就て云
 不〇不知相代ハ常闇ニ一ト晝夜ハ差別無キ云云
 代ハ年月日時ハ經テ往更々云あり万葉二十
 九日荒備勿行年替左右十一 四十一 年月乃行易及十

右ノ晝夜之殊ハ殊
 字ハ和使毛訓別
 字ノ如ク

七 三十 日荒璞能登之由吉我弊利又安良多麻乃登之
 二下 可幣流麻泥十八 三十一 安良多末乃等之由吉我敵理
 十九 十二 年往更春去者二十五 下 等之由伎我敵
 理波流多ニ導ふは是あり 如此不知晝夜之相代云
 殊又古語拾遺ハ晝夜不分と有り同ト此ハ別ニ
 水ハ神功皇后御紀ハ晝暗如夜已經多日時人曰常
 夜行之也云ハ則日暉炳燦日夜有別又日向風土記ハ
 天暗冥晝夜不別人物失道と有る也皆一なり
 備古事記沼河日賣命歌ハ阿遠夜麻延比賀迦久良導
 奴琴多麻能用波伊傳那牟阿佐比能惠美佐迦延岐豆
 と詠セリ水ノ如ク此大地ノリ視ノ衆ハ日月ノ
 巡リ更々以テ晝夜を成テ者ナリ有リ水ハ實ニ天日

の御光隠るひ坐て宇宙を却照し坐るむらひ月
ハ日光を受けて照す者あり有けり其ハ虚中ニ暗黒
ある事云ふ更なれば實ニ常夜往て今ノ暗夜ヤミの甚夜
深き状して實ニ古語拾遺ニ尔乃六合常闇晝夜不別
群神愁迷手足罔措凡厥庶事燦燭而辨と有る状にて
唯此許ある物事を見別ぬ程の事あり有けり如
何ニ可畏く恐オソまし世中ありけむ天地ノ初判よ
り以來又とハ得しも有まらけり大禍事の至極
みこころハ有けり
元テ天象を云ふ時ハ恒星ハ自
光る者あり天日ハ光暉ハ抱り
可くわと雖も斯計ハ尊き日神ハ御怒り時ありけ
り其光ハ各消盡て見えざりけむも知べらざり
備

天日ハ天中ニ在り常在ニ旋轉る大地ハ其光輝
幸聯ハ天日ハ周圍を凡三百六十五日余りして
是公運ハ一年あり若て其公運する内ハ自己
の轉有て晝夜を成す此を私運と云ふ備月ハ大地
ノ二十日余りして巡る者あり故ニ都紀ハ右有
此ハ天日ハ光を受けて夜を照す為の物あり此ハ
古ニ世ノ初ハ有初けむを素戔嗚尊の月神として入
坐る後ニ分判たりと云ハ非なり己ハ天日ハ天
地ノ初ハ有つるを日神ハ遠ニ後ニ生坐る神ニ
て所知者ハ等しく月ハ素より有つれば月神ハ遠
ニ後ニ素戔嗚尊ハ幸行るあり然るを神代巻口訣ハ
じハ不知晝夜ノ相代者日神ハ窟月神無光也と云
るハ大なる僻 右ハ古語拾遺ニ群神愁迷と云事ハ第
二ニ書ニ諸神憂之と有れば其傳ニ云べし手足罔措
ハ古事記ニ萬神之声者狹蠅那須皆滿萬妖悉祭と云
ハ如く常夜往て闇さハ晴きハ上ニ然る妖々し事

も多く出来荒振る思し、神共所を得て荒びたりし
うば身を寄る所を失ひて實は手足の置所も無し
るあり、凡厥庶事燭火而辨、彼四神出生章第六、一書
は黄泉國にて秉炬ツロヒを以て物を見行し坐る事有り
如く世ハ常闇ありしころ物毎に火を照トモして見ざれば
ハ分明しころざりしより備神等の中より甚々尊く
坐るども其御身は各々光り御在し坐るを其すくは
打消水給ひけむと所思ゆる事、天日ハくも彼葦牙
の如くして萌騰水は始より明るは御國ありけり
は其後ハ天照太神の光華明彩しく坐り天地の内

ハ照徹くせり大御光を持上り所知看させ給ふ御事
と成りより愈照輝きつるは其後ハ火産靈神の斬る
水さし給へりし血ハ天上に昇りけりより愈々益々
ハ光満足ひて今日見奉る如くありむ有けるを此ハ日
神の天石蜜ハ入給へれば初より在つる天日の自己
の光ハ亡ナクまり後ハ上りて光を増つる火産靈神の御
靈ハ御在しあるは其光共ハ隠るは竟たるを以て
自餘の諸神の身の光ハ出ず成給へる事を曉る
可くありむ有ける然れば右ハ燭火而辨と有るは甚く
力を入れて思ふ可き所有る者ありけり
又此を以て天照大神の世は

右の拾遺の文其下
は日神の出生一筆を
云ふ當此之時上天初
晴衆神相見面皆明
白伸手歌舞と云結
有少下五百三十八

又無く至尊は大神に御在し坐す御事を見奉り知る
可くまむ有けり世に唯此の常夜往しる晴き日
火を點して辨へたりと
のこ思ふに淺き説ありと
○右に引る古事記に於是萬
神之声者狹蠅那須皆滿萬妖悉禿と有
記傳八二十
は萬神に此と同じ事の前より有る惡神と有る此
も然有べき事あり萬字の誤り非しと左に右に
此惡神を云ふなりと云水なり其前あると故各隨依
賜之命所知看之中速須佐之男命不知所命之國而八
拳須至于心前啼伊佐知伎也其泣状者青山如枯山泣
枯河海者悉泣乾是以惡神之音如狹蠅皆滿萬物之妖
悉禿と所見たる是を云ふなり但此の天照坐日太神の

天石蜜に入て刺隠り御在し坐けり此のこり然る禍
しり事と有けりありけり此先の素戔嗚尊の彼謂ゆる
青山如枯山泣枯河海者悉泣乾と有けりあると神性の
雄健く御在し坐けりとの御事あり有けりとい其
は屬て荒振る惡神と非し事上の瑞珠盟約章ある
昇天の時御趣を以て知べきあり然るに此と同じ
文の前日在るに已に記傳七十一に云れたるが如く
全く此段ありし事の混水入れりよむ有けり此事
史微第三十段の事と諾はれたる説有り然る言あり
て素戔嗚尊の御事と云ては昔より彼殘賊強暴横
惡之神の如く入る云る但此の上は照し應ずる時
けり是轉有る事ありけれ

ハ實ニ萬神ハ惡神ノ誤多ク事著明ナレども此一句
ハ古語拾遺ニ群神愁迷ニ有テ合セテ考ルニ此大禍
事ニ依テ萬神ノ騷動スル事五月蠅如ク水沸カ如ク
上を下ヘト轉倒セシメテ有テ可シ彼天孫降臨章ニ
所見タル螢火光神及蠅声邪神トハ大事異ル可ク不
吐有ケル諸萬神之声トハ常夜ノ闇あり故ニ各愁
迷ヒテ為ル方無クツクめども未其奉禱ハあるの神
議ニ至ルガハ互ニ其途ニ惑ヒテ騷ク
のこころ有けれ各が自ら思ひくこの事ふして其為
行ふと素より目より見ゆ可ク此方にも彼處にも其声

△傳ニハ下蠅聲
邪神の下云々
事共を合せ見
る可

類クニ響キ渡ル者あり古語拾遺ニ日神ノ出給
ヘリ下ニ衆俱相見面皆明白ト有テ合セ考ム可ク
事あり挾蠅那須ハ万葉三五下ニ五月蠅成驟騷舍人
者五八下ニ五月蠅奈周佐和久見等遠る佐和久ノ
序ニ置ル是あり皆滿ハ記傳ニ皆滿ある可シ云ル
ハ何水ノ下ニ假字ニ出雲神賀詞ニ水沸
ト有テ義ニ水ノ沸騰ス事あるが此の皆滿ハ
みして萬神ノ騷動ク状を云ふ若ク此萬神ハ唯何
ト無ク神ノ上を云テ次ニ萬物ト有テ物ハ妖鬼不
ル其ニ對シタル者ありけり此ハ記傳ノ趣あり拾

遺は元厥廢事燦燭而辨と有りども燭火の唯手元
を明く爲るり物より有れば天下の常闇を如
何の照す事有りむ此を以て其時の若
惱ましさを想像する可事ありけり
ハ上云ふ萬神の謂ゆる神として此ある萬物の即
鬼を云ふ其鬼を物と云事已に傳十二
四十云々
か如し若て神ハ天に属く者あり鬼ハ黄泉を本處と
爲る者あり有りれば世ハ常闇と成れり
然る
殘賊強暴横惡之神ハ一處を得て勢を加ふ事
拾遺は群神愁迷手足罔厝と有り
及對ありあり
けり故其各が力の限を盡して妖の起るるあり其
悉く妖を尅せり然ハ如何有しと云々然る妖鬼を押

て上は八十柱津日神大柱津日神ハ御在し坐せし
其ハ天照太神の荒御魂ハ御在し坐せし素より索
て隠させ給ふ可事ありけり欲しは任り打振
まひけりあり傳十二百五云々か如く疫鬼の長
して氣の時置師神形ハ飽嚙神神ハ煩神有少妖鬼の
長として奥疎神邊疎神奥津那藝佐昆古神邊津那藝
佐昆古神奥津甲斐辨羅神邊津甲斐辨羅神有て此ハ
山川海陸に於て妖を成す神ありけりハ天下一般ハ
其妖の及至りあり其ハ天孫降臨章第六一書ハ
葦原中國者皆警根本株草葉猶能言語夜者若燦火而

而喧響之畫者如五月蠅而沸騰之有畫夜と相代
る時妖あり況て晝夜の別無くして常夜往たり
程の其より幾許の勝しむ今云出るはたは身
毛丸跡立て所思るや此の事怒の事御在し坐て御守
薄き時より天下一般の然る妖氣を以て受くる者にて已
に近頃外夷と親好を善為給ひてより以來天下
在り奇癖を好む曲士多く成以て行て身は皇國
の人にして心の異状の心あり内外を忘れ大戒を尊
ぶ其鄙陋實に堪へず近年の震災又ハ風難等の事は依
等や御怒坐しむ近年の震災又ハ風難等の事は依
て天下の困窮夥しなり今茲安政四年正月の
初より京大坂など大風邪の行はると聞しを何時
有る程の事あるを其始出雲より起りて山陽道の方
は傳ひて東西に弘びると新て此事の出雲より
始りて就て思ふ奇と有れば知る人不知るむ

を閣下掛まると甚可畏天照坐皇太神ハ此天
津日神日御在し坐て天地の底際の内日照徹せし
世御在し坐て天地の間は二無く尊高御太御神
渡り世給へる御事ハ今更に言舉奉るむも事舊てハ
所思の如くも此ハ一件申願ひ奉る可ハ天原既戸
押張山御照し坐り依り天の壁立極之國の退立限
少其大御光を受奉りて人の更あり世中より生り活
る物皆ハ此に依り活る穀物百の木草の片葉までも
其大御恵を得て生立て蕃息えざる事ハ見たり
知れり人皆の心誰も思ふ事あるが此大御神の誓

戸隱くせり至りて天地の依相の極又此の有
事小は天福事の至極は世に盡むと為す許は
有けぬハ八百万千万神の相與に禱奉る事二千は
心を碎き物為す水けり状あるを以て其甚しき大御
徳は御在り坐す御事知る水又此に依て荒振神の處
を得て萬妖態を發れりを以て其大御稜威の世に比
しへ無く可畏く渡り世給へる御事ある見えたりけ
る今も青山日日が隱りて野羽玉の夜に出来水ハ惡
しき人の狂業又ハ妖鬼アガモの災ある時にしてハ有を朝
日の咲榮え来水ハ誰逐ふと無く然る福ハ行物ハ

し自然に退居しあど其實に當る可うさる御
勢の御在り坐が故にあむ有けり故此を以て見ると時
ハ此時に至る迄ハ八百万千万神を雖も然計も渡り
せ給ふとまじり得知り奉るさしけり此に至りて
イ日太神は勝りて貴き神の御在り坐さる御事の顯
ハ水にせ給へる事古事記ある天宇受賣命の申給へ
る言は汝命は勝りて尊き神坐が故に歡喜咲樂と聞
えさせつるを以てあむ此太御神は勝りて貴き神の御
在り坐さる事知る水けり然水ハ八百万千万神
ひて順るるハ仕奉り初はるこころ有けり記傳七
卷二十一下ハ此意味の言述り水けり然ハ有れど

天照太神須佐之男命の二柱を以て御身渡り因
 て成坐る趣は依りたり其記を立たる説多し
 所為無きを須佐之男命の御事を黄泉の穢れ名残に
 依りて神の如く云はるる事と忌とし其辭事あり但
 斯く妖の亮るも天照太神の隠坐か故あり此は就
 て天日の明光の貴と云ふ事あり万妖の一向に
 亮るも全此太神の照し給ふ御徳ありし事を仰
 ぎ又穢れ慎しむ可き事を思へ万の妖禍の穢れ起
 るがりしと云はれり ○八十萬神は此御紀と古語拾遺
 の文法より天孫降臨章第六一書より八十諸神と書
 て諸字を與呂豆と訓し崇神天皇七年御紀より八十
 萬群神と有るは皇大神宮儀式帳より八十萬神と有る此御紀に依りて有る備此の古事記は八百萬神祝詞は八
 百萬神と有るは始て他の古書皆然し万葉二七下は
 八百萬千萬神十三下より五百萬千萬神と出雲風土

記の八天神千五百萬地祇千五百萬と有るを種々
 云様の異ふれども如此云て世に在り有る諸神の
 限を云稱と成せる者ふれば必其數は抱り泥にて
 心得べきは非るあり實に其真數は何百千萬の
 神等の御在り坐ると測知べし故に廣く如
 此云るある古の言語の大らふなり状ありける或書引
 古書紀問答と云物に向云八百萬を八十万と作る如
 何なる故に答云孝徳天皇の御諱を天万豊日尊と
 八百萬豊日尊と稱せし故に憚らるあり然るに既
 ちして其御世に書ける文に傳云多く孝徳天皇
 兩朝の史より出ると云はる有り孝徳天皇は八百萬
 豊日尊と云ふ御諱は何れも古書より有り御紀に載
 り然るも天萬豊日天皇と云ふ正しく出たりけ
 れ然る異ふる御名を出給はぬ者をや口は任せたる

天照太神須佐之男命
 御身渡り因て成坐る
 趣は依りたり其記を
 立たる説多し

杜撰あり者あり又此神紀を孝徳天皇天智天皇の大
御世の史より出たり何れ據て云ふも已に古事
記の和銅五年の書に於て者あり伊弉諾尊伊弉册尊と
命伊弉那美命と有る御紀に伊弉諾尊伊弉册尊と
作らるる如き同ト大朝臣ト此御紀の撰に仕奉り
然るに貴白尊自餘曰命の文法日被改たるを以て御
紀の杜撰有る時を萬を
改らるる事灼きを
○天安河邊ハ四神出生章第
六、一書、伊弉諾尊、遂按所帶十握劍斬斬遇突智爲
三段此各化成神也復劍刃垂血是爲天安河邊所在五
百箇磐石也之所見たる其所より彼瑞珠盟約章の天
真名并に其第三一書より天安河に有る其事ある由
傳十五百二十九下云々が如し但其の河水は用有る河
邊ハ用無を此ハ河水は用無として河邊は用有る

諸神等の會合の場あり故古事記より天安之
河原と見え古語拾遺より天八瑞河原と有る此を
一書より故會八十萬神於天高市と有り天高市の事
ハ其所の傳二十卷十丁云べし又此河の志
事ハ已に傳十卷九十一丁に註し、備此天安河邊を以て其場と成せ
る所由ハハハ四神出生章第二一書より天照太神あり
の生坐し終たると後ハ火神斬遇突智命の生出させ給
へりハを第六一書より所殺給へる御事の御在り坐け
るハ一速く其血の天日激上りて天安河邊と成れり
けり並に其火産靈神の御靈も昇り御在り坐るなり
天照す日御國の光輝をむ弥増日照炫け渡りけり

若て此日太神の磐戸隠り御在り坐し其太神
 の属従奉りせ給ふ火神の坐せ共隠るひ坐ける
 事ハ世中の常闇あるを以て知べし然れども八
 百万神等云合すとも無く此天安河邊に神集ひ
 集給へり以て知るなり然し彼万物之妖悉免
 せ云ら如き妖ハ事ハ上百四十云々如く黄泉より
 属る妖鬼の所為より有けれ其物共の甚く畏ると
 由縁有る事あるが為にあむ有ける然し其火産靈
照太神より後あり云り鎮火祭詞曰麻奈第子尔火
結神生給はと有り著けれハ第二一書正説ある事
傳九卷二十下云云如く借又天照太神の御身祿
の時又生坐ると云ハ誤りて二柱御祖神の生坐る趣

八傳二十下云々如く
 其第一一書の會字
 在加牟都度閉都度
 閉都の訓を合して此
 都度比を重ぬ訓也

あむ甚正しりけり
事を辨ふ可くしけり
 ○會合ハ迦牟都度比の訓ハ古
 事記ハ是以八百萬神於天安之河原神集集而る有る
 下ハ訓集云都度比と有る是より記傳八二十此ハ
 誰神の命とも無く唯自然集へる故に都度比と訓し
 云水たるが如く備此八百萬神の神集ひ坐る其始
 ハ傳十五四十伊弉諾大神の登天報命の下云云が
 如く二柱御祖神共日生坐し御子神等の限りも
 悉く此より以前に其大神の陪從に奉りて上天を参
 昇りせ給ひ日之少宮に留り御在り坐しむか悉く此
 日會合ハ世給へるより有べりしけり若く此御時

より正身を天照國に留めて永ふる高先の日宮に
 仕奉り侍りし世給へる御事なご有べしと云
 む伺奉らるる御事ありと云
又元より天上有て天照
 大神の天津朝庭に侍給
 不神等ハ猶更の御事あり又故有て此顯國に留り御
 在し坐る神等ハ參集して有りて如何に侍りし
世中ハ在り有る諸神等の
 悉くハ參集し給へりしあり
 會八十萬神於天高市而問之トハレシク有り此日てり何れハ
ツカサド專當る神有て令會給へる趣あり此ハ打合るる古語
 拾遺ハ高皇產靈神會八十萬神於天八瀨河原議奉謝
 之方と有る是より此ハ明辨有り古史徵第四十此
 事實の上より思ふより天照太御神の幽居して是ト

禍事の起れるふれハ八百万神等誰集へぬとも集り
 たりけむ事ハ信ハ然有べき事あり 倚然己自
 集りたる上より其上看れる神ハ產靈神ハ坐す事論此又
在事ハ無一故高御產巢日神之子思金神令思と有る此神
 の令思たるあり然るを其記ハ此神之命以而て云べ
 るハ記殘したるあり例を云つて下文ハ召天兒屋命
 布力玉命而云々令占合麻迦那波而て有るを思ふ可
 此時高皇產靈神神皇產靈神も集り坐けむ事ハ論無
 きを殊々召て令せ給へる神ハ產靈神ハ坐すハ何れ
 の神ハ御事と云むと云れりハ甚と詳と云説

世中の大禍事の至極に在りて大善事の發端と成る
所より有けり八百万神の己自集へる事も有れ其仰
事の皆かく高皇產靈尊神皇產靈尊の大御命あり
ずば得有べくもぬ御事ありむ有けり其の古語拾遺
の麻と穀との事を以上二物一夜蕃茂也と有り天日
の光隠るひて世の常夜往りるも然る物と暫時の間
も成出らるるも彼預鑿造天地と云ふ神功ありずば如
何ありし容易く成以て出来る事を得む此一事を以
ては今度の萬の事共より專其大神等の御心ある事
多在りぬ可き御事ありり御祖神の初天降り坐し

但此二大神ハ一也二柱
御祖神の初天降り坐し

公下相與致祈禱
焉者之祈禱也
然訓也

より後復命し給へる程の大神に渡りて給へるを
其御子と坐す天照太神の御禱も然勞りて給ふ可く
も非るか如く思ふ人も有るも其の俗びたる意
もむ有けり天孫降臨章第二一書より高皇產靈尊
因勅曰吾則起樹天津神籬及天津磐境當為吾孫奉齋
矣汝天兒屋命太玉命宜持天津神籬於葦原中國亦
為吾孫奉齋焉と有り天社國社を祀祭る御政を事始
め定させ給へるも御在り坐す此を以て然る疑
解べき者也 ○可禱の伊能理麻都流倍伎と定めて訓
べきもの又一の第三一書に廣厚稱禱祈啓矣と有り依
て能美麻都流倍伎と訓む可く又古事記石屋戸段に
禱白而有之隨ひて祢岐麻都流倍伎と訓つ可く又此
第一一書に奉招禱也と有り例して袁岐麻都流倍伎
と訓つ各其義違不可くざれば此の伊能流の

公於少後仲天皇五
年御紀之禱而不相
言也如禱而相
言禱之祭祀を行
ふ云々の

方然る可く多む有ける景行天皇十二年御紀之天皇
祈之曰略是時禱神者云云神功皇后御紀之捧劔鏡令
禱神祇云と見云方葉十三十八天地之神祇宇曾
吾祈又或本歌之天地之神呼曾吾乞又乾地乃神宇禱
而又或本歌之玄黄之神祇二衣吾祈二十二十阿良
例布理可志麻能可美宇伊能利都二又八十阿米都知
乃可美宇伊乃里氏又二十阿米都之乃以都例乃可美
宇以乃良波加又八十須美乃延能安我須賣可未尔奴
佐麻都利伊能里麻宇之豆と見由名義抄之禱を伊能
理伊能又許布と詠此ハ射宣の義とて其的標と

公第三一書之使所焉
と有り又

指す神と一向に願思ふ事を宣申す義と聞えたり或
禱言宣也と云れども言重ゆて如何又士清ハ忌宜と
て忌ハ敬しむの謂あり云るハ例ハ土金傳ハ因ハ
説ありて云るハ足ぶる言あり新撰字鏡ハ詔又註を
も訓ハ名義抄ハ禱をハ禱をハ祈をハ祀をハ祠をハ
社をハ祝をハ禮をハ訓ハ又能年と云ハ公右ハ
説文ハ禱告事求福也と見えたり又能年と云ハ公右ハ
引る廣厚祿禱啓矣と有り更なる古語拾遺ハ此ハ
事を議奉謝之方と有る是あり宗神天皇七年御紀ハ
沐浴齋戒潔淨殿内而祈之曰略又十年の所ハ知不得
免叩頭曰我君と有り下ハ叩頭此云逆勢又四十八年
の下ハ淨沐而祈寢又神功皇后御紀ハ新羅王が畏伏
の所ハ降王船之前因以叩頭之曰云々自來于營外叩

父能傳天皇御紀云光
源口手祈請曰汝是善
神有子祈請能
美比能訓

頭而歎曰云云其四十六年御紀曰祈天神曰略當如所
願と見え古事記朝倉宮段曰其大縣主懼畏稽首白略
故獻能美之却幣物あど有る叩頭又ハ稽首の字を作
るハ和名抄曰叩頭虫出之細微者鰯之輒叩頭和名沼
加豆木無之と有る額突く事ありと雖も右曰叩頭曰
我君と云るハ其一人を指テ殊ニ親ト云語あるを
思へむ語末曰而已と云辭有る其と同ト唯我君而已
ト云ふ義ヲ額突ハ其時ト止動を云ふ有ける方
業三 一ト 天地乃神祇乞禱五ト 天神阿布藝許
比乃美地祇布之互額拜可加良受毛可賀利毛神乃末

今又加豆久ハ右
五卷布之互額
拜を始ト四三
不相念人半思者
大寺之欲鬼之後
亦願衝如と有る
源氏夕顔三ハ御
高精進ハ有るハ
公羽ハ九ハ聲ハ額
突ク聞ゆハ有
を礼拜也ト願
也ト稽首也ト
額拜也ト諸抄ハ
注レ總角ハハ
常不經を有る都
加世侍らる申す
ハ又中門の許ハ
て是等ハ都ハ
有る都加世ハ
拜ハ事ト有るト
能事ト云ハハ
此能年又奴加豆
久の事猶傳ト
卷百三ト云ハ

此能年又奴加豆
久の事猶傳ト
卷百三ト云ハ

尔麻仁等立阿射里我例乞能米登又布施於吉豆吾波
許比能武十七 四ト 奴佐麻都里安我許比能麻久又
四ト 知波夜夫流神社尔底流鏡之都尔等里蘓倍已
六ト 比能美底二十六ト 安米都知乃可未予許比能美奈
我久等曾於毛布と有る皆能年の例あり 名義抄曰
又伊能理又牟久由又祢賀波久婆又母登牟と訓ハ此
ハ能年と云訓無ハ古書ト祈をト禱をト能年ト
云事常あり好を許能年と云リ此而耳の義あり吞を
能年と云るも共ト司トト皆其事の唯一途
あり義不 又禱を祢政麻都流と訓ハ古事記天御饗食段
小禱白而と有を傳ト祢政白而と訓ハ願ハ義不
り出雲風土記ト枳佐加比比賣命願吾却子麻須羅神

御子坐者所亡弓箭出來願坐又大神夢願給告御子之
哭由夢爾願坐万葉四二十日秋百夜予願鶴鴨五三十
小栲繩能予尋尔母何等慕久良志都十一二十日千石
破神社予不祈日者無又神社予不禱日者無二十五十
日奈保之祢可比都知等世能伊乃知予有有和名
抄日巫を加半奈岐現を字乃古加半奈岐と有る加半
奈岐ハ神禱ハムネキの義より神社日仕奉る祢直是より令釋
より引る古記日祢義等申辞者輸不使知也と有る如く
其願辞を神ノ聞達ハミマカる由り職掌あるあり其日合せし
祢具と音舉の義より言を舉て神日乞求る謂ある

を知べし又此より出て人を勞る義ある一種有り
景行天皇十二年御紀日祢疑野又祢疑山と云ふ地名
有る豊後風土記日天皇親欲伐此賊在茲野勅ホキナク歷勞兵
衆因謂祢疑野是也古事記同段日天皇詔小碓命何汝
兄於朝夕之大御食不參出來專汝泥疑教覺又万葉六
二十日食回遠乃朝廷尔汝等之如是退去者平久吾者
將遊手抱而我者將御在天皇朕字頭乃御手以搔撫曾
祢直賜打撫曾祢直賜將還來日相飲酒曾此豊御酒者
ある有る祢直ハ元來上の祢具より轉ウなる者あり
万葉十一日禱を祢具と訓る證と為す若し其ハ願
の義日出同トウ其事を乞求るが為る音を舉

齊明天皇五年
御紀の便即招慰
島人云々坐十九

るふて有ける天台止觀日 又禱を袁岐麻都流と訓
志求満足祢願と見えたり 又禱を袁岐麻都流と訓
ては通のり此第一一書日宜圖造彼神之象而奉招
禱也と有る其日合せて古事記御天降段日其遠岐斯
八尺勾璉鏡と有る招禱實と云義ありあり此下日作
俳優と有る熊招とて噓樂の態を為て太神を誘つり
奉るを云り海宮遊行章第八一書日天孫宜在海濱以
作風招風招即嘯也如此則起瀛風邊風以奔波溺惱と
有る招の誘ふふあり起ハ其日應ふふあり万葉十九
十七日梅花手折手伎都追遊尔可有又 二十月立之日
欲里手伎都追敲自努比麻低騰伎奈可奴霍公鳥可母

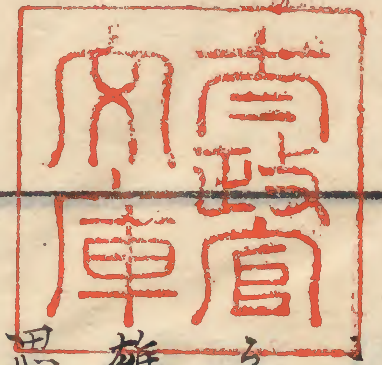
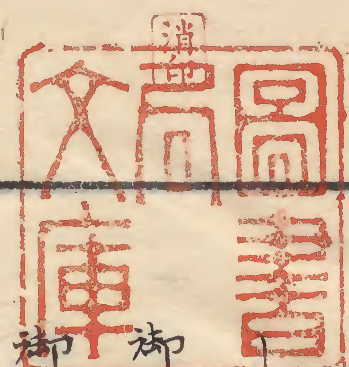
又神樂韓神歌日三島木綿肩日取掛け我韓神の加良
袁岐止むや加良袁岐の有るを休源抄日加良袁岐ハ枯
たハ萩を云りや清暑堂日御神樂の試樂執柄家日
行ハる時人長枯たる萩ハ枝を持つ事有り是秘事
ありと見え源語 若菜 下卷 若かりあり上達部ハ肩脱て
略見之詮多在る姿共ハ甚白く枯たる萩を高かりハ
刺頭挿て唯一返り舞て入ぬるハ甚面白く飽ず有
けらと空招ハ枯萩を云係たるあり是等右の招禱ハ
袁岐日假字あり證あり又和名抄ハ萩和名乎木と有
ハ常日其葉日低昂あり状物を招く日類々を以て

云称あり又同抄に蚺鱓和名乎歧無之屈伸虫也と有
あとも右に同義の名あり又神武天皇御紀に誘虜
而取之と有を始として御紀に多く誘を袁許豆流と
又和名訓るに招釣の義あり源氏巻 二袁許豆理取む心
よて欺給ふと見え古今六帖第五思煩くふと云題に
て仇人の袁許豆理竿の危ふさよ兼引く事の難くも
有りよ又賀茂保憲が集りに袁許豆理竿に掛れる云
こと有ると釣竿に係て釣るるとも招き寄る義にて
右の袁具に出たるよて皆同ト意ある者ありと一義
抄に招を麻祿久又登流又所宜氏まて云訓見え誘は
佐曾布又須々年又袁許豆流又美知昆久あとの訓有

シ又字鏡集に時をい倭をい袁許豆利と訓と又機字
を袁許豆利と和加豆利と訓たり右に如く招を
袁具と訓濁水と訓と袁許豆流の袁許の清て訓と見ゆ○方ハ古語拾遺に議奉
謝之方と有ると共に佐麻と訓り此ハ日神を招奉る
む行事作法を云ふり寶篋出現章第六一書に為顯見
蒼生及畜産則定其療病之方又為攘鳥獸昆虫之災異
則定其禁厭之法と見え右より方と法とを相對し
たる此を以て此の方ハ即法ある事を知てきなり故
此に諸神等々各々相共々種々の作法を成て其隱坐
し天照太神の大御心を取奉りて磐戸より出し奉る
むと爲る事共皆此に謂ふ方なり即奉禱之方あり

者あり此佐麻之云事の委しき由ハ傳十五卷八十五
下來諸之狀ハ有る下ニ云ハ但其狀ハ状態ハ
少シ此方ハ方術計ハ波加理伎ト訓ベシ即古語拾
遺ニ議奉謝之方ト有る是より古事記御天降段ニ神
集八百萬神集而思金神令思而詔略ル思金神及八百
萬神議白之云云ト有る此事を大殿祭詞ニ以天津御
量云云大被詞ニ八百萬神等神集ニ賜比神議ニ
賜比遷却崇神詞ニ神議ニ給時諸神等皆量申云
云是以天津神能能神言以能更量給能と見え万葉二
ト六ニ八百萬千萬神之神集ニ座而神分分之時ルあり
見えたる議又ハ量又ハ分ありと字ハ異ありども同

ト言あり又ハ文選ニ謀をト訓ニ又評をト変をト圖
ト謀計をト計策をト籌策をト詠をト又ハ謀略をト計略を
ト同備此ニ深旨有べシ彼高皇產靈尊神皇產靈尊ト申
奉ニ二柱大神ハト己ニ伊弉諾尊伊弉册尊二柱御
祖神ノ初天降少御在シ坐け之時ニ御事依シ御事
ハ更より世中ニ在リ有る萬ノ物をも事をも始
マセ御在シ坐テ天地ノ底際ノ内ニ又無ク尊キ高キ
大神ニ御在シ坐るる世ニ有る限ノ事ハト何レ
の事をも知シ看テ御在シ坐ズ有む又如何ある事を
ク成シ出させ御在シ坐ぶるむ然るを此日天照太神



の警戸隠れ御在し坐けるよ八百萬神等を神集へよ
 集へさせ御在し坐て神議りて議るに御在し坐すに
 諸神等曰汝ハ何事を為す可し汝ハ何物を造る可
 し其事の堪れる事共を直に指著て命じ給ふ可
 御事あるは然各其神の智る所を聞着し上させ
 御在し坐て其計る所を因准はせさせ給へるあむ實
 皇産靈神の皇産靈神たる所以ある御在し坐し
 ら其ハ此の思兼神の思慮の智御在し坐けるも手力
 雄神の警戸破る手力御在し坐し其本をよ云ハハ
 思兼有る神と成し手力有る神と成し給へるも皆此

日本書紀傳十九之三
 紙頁五拾五葉
 九月三日校了三輪彦輔

